

多摩川流域・河口域における釣り場環境評価

千葉工業大学 学生会員 ○原田寛己

千葉工業大学 フェロー 五明美智男

1. はじめに

多摩川河口域ではかつて海産物に恵まれていたが、高度経済成長に伴う干潟の埋め立てや生活・工場排水などの影響で生物の生息場が減少した。東京湾の象徴ともいえるマハゼも影響を受け、多摩川河口域でも減少してきた。東京湾全体では、1962年以前は100 tから300 t程度の漁獲量があったが、その後は激減し、2003年には5 tにまで落ち込んでいる¹⁾。しかし、現在もなおマハゼは「遊漁」のなかでも、誰にでも簡単に釣ることができる最もポピュラーな対象魚であり²⁾、広く親しまれている。そこで本研究では、ハゼ釣り調査および釣り人や河川利用者へのインタビューなどから集めた情報により、利用者からみた多摩川河口域の釣り場環境の現状を調べ評価することを目的とした。

2. 多摩川河口域の概要

多摩川河口域に現在もなお残る多摩川干潟は、生物の生息場や水質浄化機能の働きとして貴重な自然干潟である。多摩川河口域の右岸側ではヨシ原が広がり、ヨシ原も生物の生息場や水質浄化機能として重要な働きをしている。また、広がるヨシ原は壮大であり、見る人を感動させる効果もある³⁾。

多摩川河口域は、首都圏にありながらも自然と触れ合えることができ、レクリエーションとして春から初夏にかけては潮干狩り、夏から秋にかけてはハゼ釣りの場として利用されている。

3. 研究方法

3. 1 調査地点

調査場所は、東京都大田区羽田と神奈川県川崎市川崎区殿町に挟まれる多摩川河口域（河口から約1.5 kmから2.5 km離れた地点）とした（図1）。

3. 2 ハゼ釣り調査

ハゼ釣り調査では、ハゼ釣りが始まるシーズンの6月からシーズン終盤の11月にかけて、述べ竿を使用しウキ釣りの仕掛けで調査を行った。

3. 3 河川利用者調査

3. 3. 1 インタビュー調査

インタビュー調査では5月から12月にかけて行い、釣りや散歩などを行っている河川利用者を対象に、図1の赤線で示した範囲で右岸と左岸に二手に分かれて行った。レクリエーションとして活躍する多摩川河口域において、実際に利用者はどのような印象を持っているのか評価するために、「利用のしやすさ」「利用者のマナー」「今後も利用したいか」をヒアリング形式でインタビューをした。

3. 3. 2 利用者数調査

インタビュー調査実施日の集客数の多いと予想される午後2時に、左岸と右岸での釣り人、潮干狩り、サイクリング、散歩・ランニング・休息・その他の4項目に分け、河川利用者数を集計した。



図1. 調査地点

キーワード：多摩川河口域、釣り、マハゼ、インタビュー、

連絡先 〒275-8588 千葉県習志野市津田沼 2-17-1 （千葉工業大学 生命環境科学科） TEL. 03-3358-6620

E-mail:michio.gomyo@p.chibakoudai.jp

4. 結果および考察

4. 1 ハゼ釣り調査

ハゼ釣り調査では、ハゼ釣り経験のない研究室メンバーで行った。6月29日は4名、7月26日は5名、8月25日は5名、9月27日は4名、10月25日は4名、11月8日は5名でハゼ釣り調査を約5時間行い、その釣果を表1に示す。

表1. マハゼの釣果

体長 (c m)	日付					
	6月29日	7月26日	8月25日	9月27日	10月25日	11月8日
4.0~	0	0	0	1	0	0
5.0~	3	0	1	4	0	0
6.0~	17	3	0	0	0	0
7.0~	25	7	4	0	0	0
8.0~	14	22	9	5	0	1
9.0~	3	17	9	12	0	1
10.0~	1	10	3	14	0	1
11.0~	0	2	2	2	2	3
12.0~	0	0	2	1	1	0
13.0~	0	0	0	0	1	0
14.0~	1	0	0	0	0	0
15.0~	1	0	0	0	0	0
合計(匹)	65	61	30	39	4	6
1人あたりの1時間の釣果	3.25	2.44	1.20	1.95	0.20	0.24
平均体長 (c m)	7.7	8.9	9.2	9.3	12.3	10.4

調査の中で最も釣果の多かったのは、6月29日の65匹で1人あたりの1時間の釣果は約3.25匹であった。最も少なかったのは、10月25日の4匹で1人あたりの1時間の釣果は約0.20匹であった。マハゼの平均体長に関しては10月25日では釣果が最も少なかったものの、平均体長が12.3cmと調査の中では最も大きかった。11月8では平均体長が10月25日と比べ低かったが、調査全体を通して見るとマハゼの体長が月ごとに大きくなり、マハゼが成長していることがわかった。

調査終盤に釣果が減少した要因は、マハゼは成長するにつれて深場のある沖へ移動するため、述べ竿で届く範囲には多く生息していなかったためだと考えられる。したがって、最大釣果を追跡するためには、釣りの手法を変更するなどの対応が必要である。

調査終盤はメンバー全員の数を合わせても、わずかしきマハゼの釣果がなかった。しかし、次項でも説明するが、多摩川河口域は護岸整備が良く釣りがしやすいとして利用者から高い評価を受けており、ハゼ釣り経験がない者でも、安全に釣りを楽しめる環境として一定の評価ができるものと考えられる。

4. 2 河川利用者調査

4. 2. 1 インタビュー調査

インタビュー調査では、「利用者のマナー」については47名、「利用のしやすさ」については50名、「今後も利用したいか」については51名から回答が得られた。その結果を図2に示す。

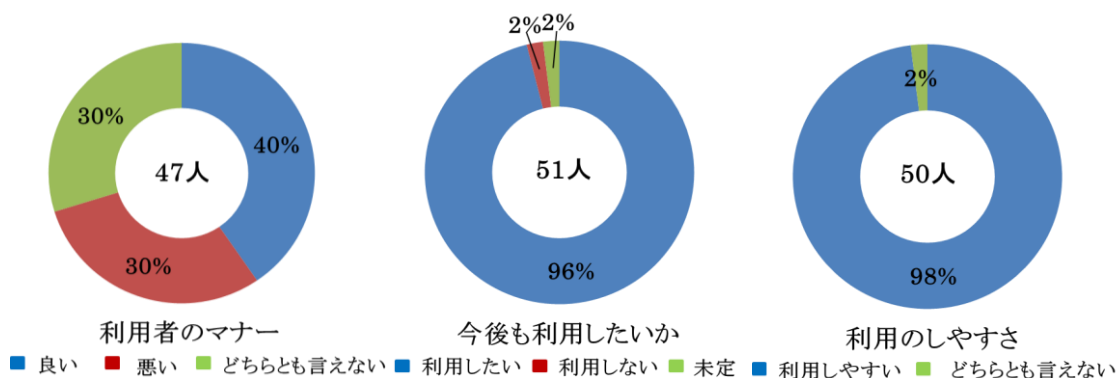


図2. インタビュー回答結果

まず「利用者のマナー」については「良い」という回答が 19 名の 40%であり、「ゴミを捨てる人がいない」「ゴミをキッチンと持ち帰る」といった意見が 9 名から得られた。他の意見では「マナーは良いが、貝の乱獲はやめてほしい」「マナーは良いけれど、ホームレスを何とかしてもらいたい」という要望のある意見も得られた。次に「悪い」という回答は 14 名の 30%であり、「ゴミのポイ捨てを見かける」「釣りの仕掛けを捨てる」といった意見が 13 名から得られた。「利用のしやすさ」については「良い」という回答が 49 名の 98%であり、回答者の 9 割以上が利用しやすいと実感していたことがわかった。意見としては 24 名が「護岸整備が良く釣りがしやすい」「歩道整備がしっかりとしている」といった河川整備の充実さについての意見で、約半数を占める結果となった。他にも「アクセスが充実していること」や、「自然環境が良い」「他の利用者と仲良くなれる」といった自然や人との触れ合いの場としても良い環境である意見もあった。また、「どちらとも言えない」という回答が 1 名で、「利用はしやすいが、堤防工事をしているところが歩きづらい」という意見も得た。最後に、「今後も利用したいか」については「利用したい」という回答が 49 名の 96%で、「利用しない」「未定」という回答が共に 1 名ずつであった。「未定」の意見は年齢的なものであり、「利用しない」の意見は得ることができなかった。

これらのことから、多摩川河口域では利用環境が良く、利用者から非常に高い評価をされているが、マナーに関しては利用者の半数以上が満足する評価ではなく、ゴミ問題の改善が必要とされる河川であると考えられる。

4. 2. 2 利用者数調査

利用者数調査では右岸と左岸で集計した。右岸の利用者数調査結果を表 2 に示す。

表 2. 右岸側集計結果

集計数	5月3日	6月14日	7月12日	8月16日	9月13日	10月18日	11月15日	12月15日
散歩・ランニング・休憩・他	95	116	12	2	57	28	12	11
サイクリング	44	11	15	6	6	15	15	1
潮干狩り	117	4	3	0	0	0	0	0
釣り	0	0	5	3	2	1	2	0
合計(人)	256	131	35	11	65	44	29	12

右岸では利用者数が最も多かったのは 5 月 3 日の 256 人で、最も少なかったのは 8 月 16 日の 11 人であった。また、目的別で見ると散歩、ランニング、休憩、サイクリングといった、水辺以外での利用者で多く占めた。釣り人は 7 月 12 日の 5 人が最大であった。11 月 15 日、12 月 15 日の調査では堤防工事（図 3）のため利用者が少なかった。潮干狩り客は 5 月 3 日の調査では、117 人と全体の利用者の約半数を占めたが、以降の調査では激減した。

次に左岸の利用者数調査結果を表 3 に示す。

表 3. 左岸側集計結果

集計数	5月3日	6月14日	7月12日	8月16日	9月13日	10月18日	11月15日	12月15日
散歩・ランニング・休憩・他	119	78	57	64	73	58	115	24
サイクリング	60	24	37	29	44	47	59	12
潮干狩り	59	15	0	0	3	0	0	1
釣り	7	6	17	80	84	94	60	4
合計(人)	245	123	111	173	204	199	234	41

左岸では利用者数が最も多かったのは 5 月 3 日の 245 人で、最も少なかったのは 12 月 15 日の 41 人であった。釣り人は 7 月 12 日の調査から増加し、8 月から 10 月にかけては釣り人が全体の利用者の約半数を占めた。

右岸で釣り人が少なかったのは、右岸ではヨシ原が広がっている（図 4）ため、釣り場が少ないことや安定した足場が確保できないためだと考えられる。対して、左岸では護岸整備（図 5）がされており、インタビュー調査でも「護岸整備が良く釣りがしやすい」という意見もあったことから、釣り人が右岸よりも多かったと考えられる。

利用者数調査を行い、5 月は潮干狩り、夏から秋にかけては右岸では少なかったが、左岸では釣りの場として多く利用されていた。このことから、第 2 章で説明したように、多摩川河口域はレクリエーションの場として機能していることがわかった。



図 3. 堤防工事の様子



図 4. ヨシ原の様子



図 5. 護岸の様子

5. まとめ

本研究では、多摩川河口域においてハゼ釣り調査、河川利用者調査を行い、以下の知見を得た。

- ①ハゼ釣り調査の釣果から、マハゼの成長が確認できた。
- ②ハゼ釣り経験のない者でも、河川整備が整っていることから安全に釣りが楽しめる。
- ③インタビュー調査結果から、利用環境としては利用者から高い評価であるが、ゴミ問題の改善が必要とされる。
- ④利用者数調査結果からレクリエーションの場として機能している。

今回のハゼ釣り調査および河川利用者調査は、それぞれ月に 1 度の調査であった。今後は調査の頻度を増やし、データをさらに蓄積することや、釣りに影響を与える潮汐によって、河川利用者の状況がどのように変化するか分析し、釣り場環境をより評価することが必要である。

参考文献

- 1) 工藤貴史、吉野暢之：東京湾における人とマハゼの関係史、財団法人東京水産振興会、水産振興 第 516 号、62pp(2010)
- 2) 田中皐介、五明美智男：多様な情報から見た釣り場環境分析—江戸川放水路を例として、土木学会関東支部第41回技術研究発表会(2014)
- 3) 湯谷賢太郎：多摩川河口部ヨシ原の環境調査、総合研究機構プロジェクト研究成果報告書、第 5 号(18 年度)pp.616 - 617 (2007)